

令和4年度第3学期始業式式辞（放送）

おはようございます。穎明館生の皆さん、あけましておめでとうございます。2023年、令和5年のスタートです。冬休みは穏やかに日本文化や風習に浸かりましたか。エネルギーを充電して、新たな決意を固めましたか。古来、日本では新年を迎えるときには、「一年の計は元旦にあり」と言って、自らの心を引き締めてきました。始業式、新学期のスタートを漫然と迎えるのではなく、この1年に実行したいと思うことを明確にしておくことは大切です。英語では、“**Well begun is half done.**”（初めよければ半ば終わったようなもの）と言うようです。初めが肝心であることを知っているのは日本人だけではないのでしょうか。

その一方で、「今年こそは頑張るぞ」とか、「今年の目標は………」と決意を固めても、日を重ねるごとにその決意すら忘れ、「三日坊主」になった経験はありませんか。「こんなはずではなかった」と自問自答した覚えが私にはあります。決めた目標、目的を成し遂げるためには、地道な努力の積み重ねが必要です。世阿弥の言葉として有名な「初心忘るべからず」は、慣れからの慢心を戒めています。時々立ち止まって、「三日坊主」を断ち切る気概を持ちましょう。大切なのは「初心」を忘れずに自己を磨き続けることです。勉強、クラブ活動をはじめ、皆さんの多方面での活躍を期待しています。今年も健康・安全・無事故を心がけ、大人になることを意識して、世の中のためになることや社会貢献の意識も高めてほしいと思います。

ところで2023年、今年には学校法人堀越学園にとって100周年を迎える記念すべき年です。私立学校では周年行事を大事にします。節目の年を意識することで、学園・学校としての初心、すなわち建学の精神や創立の思いに立ち返り、未来に向けての歩みを強くすることができます。本校・穎明館については、堀越学園60周年の際に、当時の堀越学園理事長であった堀越克明先生が、新たに創立を決意されました。穎明館ももうすぐ40歳です。今までも創立者の熱き志については、式辞や1年生向けのキャリア教育においても紹介してきました。今日は学園・学校としての「初心」に立ち返るべく、少し長くなりますが、堀越克明先生の力強いお言葉を、1992年の入学式式辞より抜粋して紹介したいと思います。

ここ高尾は皇居のある千代田区から西へ約40kmの所にあり、周辺には緑濃き景色が見られ、少し北には浅川が流れています。その河原近くには、大正天皇の多摩御陵、昭和天皇の武蔵野陵があります。

ちょうど同じように、ロンドンのバッキンガム宮殿付近からテムズ川を西へ約40kmさかのぼると、ウィンザーという町があります。ここにはウィンザー城があって、エリザベス女王が時々滞在されますが、城下には有名なイートンスクールがあります。創立以来すでに

600年近い歴史と伝統を持つ男子校で、イギリスの模範となるべき紳士を育てる学校として知られています。イートンスクールに入るために、男子が生まれると、心ある家庭の親は役場に出生届を出しに行くのと同時に、イートンスクールに足を運び、できれば将来この学校で学ばせてほしいという登録をするのだそうです。イートンスクールは素晴らしい卒業生を世に送り出しています。政界・財界・教育界の指導的な人たちや、数々の戦争でイギリスを守って戦死した多くの人たちが、卒業生のなかにいます。イギリスのリーダーシップをとるにはイートンスクールで少年時代を学ばせるべきだというふうにイギリス国民は考え、慕っており、学校はその期待に応えるような教育をしています。

私は今から10年ほど前、イートンスクールのような学校をつくりたい、日本の将来を真剣に担い、リーダーシップをとれるような高潔な品性を備えた紳士・淑女を育てたいという願望を持ちました。そして理想を実現する第一歩を始めたのが、昭和60年です。イートンスクールに比べれば、その足元にも及ばないようなわずか7年の歴史でしかないが、学校創立の理想は着々と育っています。皆さんの先輩は、入学以来、“何をなすべきか”ということを実際に考えて、素晴らしい学校生活を送ってきています。新しい学校ですから、すべてのものをみんなの力でつくっていかねばなりません。これから10年、20年、50年たって、「穎明館の校風と伝統は何ぞや」と人に聞かれたとき、「ああ、あの学校の今日の素晴らしい校風と伝統は、私たちがその創設のころ、みんなで努力してつくりだしたものだ」と答えられるような素晴らしい学校づくりをしようではないかというのがここに学んでいる生徒や先生の思いです。卒業生は高校をまだ5回しか出していないし、人数も多くはありませんが、その人たちは意義ある学校生活をここで送り、それぞれの目的に向かって大変な努力をし、多くの人が素晴らしい栄冠を勝ち得て、大学で学んでいます。

皆さんは、こうした学校にふさわしい生徒として選ばれて入学したのですから、今日からこの学校に参加して、いい伝統と校風をさらにつくっていかうではありませんか。これからやりようによってはどうにでもなるという“無地からの出発”“白紙からの出発”というのは、まことにやりがいのあることだと私は思います。そういう意味で、学校のみんなが真剣にこの学校づくりをやっています。今は、出発後のまだ間もない過程にある訳です。先生方は皆さんに対して多くの示唆を与えて下さると思いますが、皆さんがみずからまず学ばなければならない。そのお手伝いをするのが先生なのです。自主的なとりくみがなければ効果はあがりません。人にいわれたからやるのではなく、みずから進んで物事に当たっていく若々しいファイトがないと、人生は切り拓いていくのが難しいものです。

世界は大きな激動の時代を迎えています。日本は国際社会の一員として、世界人類のためにこれからどう貢献をするかという、大きな課題があります。日本は戦後めざましい経済発展をとげました。皆さんは恵まれた国に生きています。しかし、だからといって、日本は自

分の国のことだけ考えていていいのでしょうか。皆さんのような若い人がしっかり自分自身を磨き、実力をつけ、これからの世の中を背負っていく。日本が世界から「日本はなんて勝手な国だろう。自分のことしか考えない不都合な国だ」といわれないで済むように、世界のために貢献する。そのような時代がやってきています。皆さんは“何をなすべきか”ということをこれからしっかり考え、勉強して行って頂きたいと思います。

穎明館生の皆さん、どうですか。——「イートンスクールのような学校をつくりたい、日本の将来を真剣に担い、リーダーシップをとれるような高潔な品性を備えた紳士・淑女を育てたい」、「学校に参加して、いい伝統と校風をさらにつくっていいようではありませんか」、「自主的なとりくみがなければ効果はあがりません。人にいわれたからやるのではなく、みずから進んで物事に当たっていく若々しいファイトがないと、人生は切り拓いていくのが難しい」、「世界のために貢献する。そのような時代がやってきています。皆さんは“何をなすべきか”ということをこれからしっかり考え、勉強して行って頂きたい」——、創立者の刺激的な数々の言葉に穎明館の初心、建学の精神を強く自覚させられませんか。この式辞からすでに30年が経ちました。その間の先輩方も立派に学び、今現在、社会の各方面で大いに活躍されています。5000名を超える卒業生は学校の宝、穎明館の誇りです。

学校、穎明館は関わる全ての人たち——在校生、卒業生、保護者、教職員、企業協力者、受験希望者、近隣の方々等々、穎明館に思いを寄せる人々のすべての思いや行動を結集して成り立っています。とくに在校生皆さんの一人一人の思いや行動は、今後の穎明館を大きく左右していくのです。ともに学び、ともに新たな歴史、よき伝統を創っていきましょう。

最後に、6年生、36期生の皆さん、いよいよ大学受験が始まります。今の創立者の言葉の中に、「卒業生は高校をまだ5回しか出していませんし、人数も多くはありませんが、その人たちは意義ある学校生活をここで送り、それぞれの目的に向かって大変な努力をし、多くの方が素晴らしい栄冠を勝ち得て、大学で学んでいます」とありました。その後今日まで、30年にわたる先輩方が後に続いてきました。36期生の皆さんも必ずや栄冠を勝ち得ることができると信じています。受験は団体戦です。仲間同士、励まし合いながら、自信を持ってチャレンジしてください。今年も高校教員室・昇降口の合格掲示板が、皆さんの名前で埋め尽くされることを楽しみにしています。5年生以下、後輩の皆さんも応援の気持ちを持って、後続く努力をしていきましょう。

今日は、今年、記念すべき堀越学園100周年を迎える中での穎明館の初心、建学の精神について、創立者のお言葉に基づいて立ち返りました。「初心忘るべからず」です。穎明館生皆さんが新学期、始業式の決意を大切に、充実した1年にすることを期待しています。

以上、令和4年度穎明館中学高等学校第3学期始業式式辞と致します。